

第2巻第1章 貨幣資本の循環 三つの段階 要約

第1段階 G-W 貨幣は商品(CとV)に変換される

第2段階 Wの生産的消費(生産過程) W→W'

第3段階 W'-G' 資本家の商品W'は、貨幣に変換される

【定式】 G-W...P...W'-G'

・第1巻では、第1段階と第3段階は、第2段階生産過程に必要な 限りで論。資本が種々の段階(反復する循環)で採る、棄てる種々の形態は考慮されていない。第2巻では、これらの諸形態が研究対象となる。

第1節 第1段階 G-W

- ・貨幣の商品への転化。売り手にとっては諸商品の貨幣への転化。
- ・労働力A 生産手段P<sub>m</sub> 買われる商品額W W = A + P<sub>m</sub> 簡単には G-W-A  

$$\begin{array}{c} \swarrow \\ \text{P}_m \end{array}$$
- ・G-Wは、G-Aと、G-P<sub>m</sub>とに分かれ、G-W-A貨幣額は二つの部分、労働力と生産手段を買う。
- ・G-W-Aは、G(貨幣)の商品額の質的分裂(AとP<sub>m</sub>)と、一つの量的関係を表す。
- ・買われる生産手段の量と範囲は、労働量の充用に足るもの。
- ・貨幣形態で前貸した価値は、剰余価値(商品の姿での)を生む価値として、それが実現される現物形態で存在。
- ・それは、価値と剰余価値を作り出すものとして機能する能力をもつ、生産資本という状態・形態Pとで存在する。
- ・Gは、Pと同じ資本価値であるが、異なる存在様式、すなわち貨幣状態または貨幣形態における資本価値-貨幣資本である。

【貨幣資本の生産資本への転化】

- ・G-W-A  

$$\begin{array}{c} \swarrow \\ \text{P} \\ \text{m} \end{array}$$
 資本の独立の循環過程における段階としては、貨幣形態からその生産形態への資本価値の転化、簡単には貨幣資本の生産資本への転化でもある。
- ・ここでは貨幣が資本価値の最初の担い手として現れ、貨幣資本が資本の前貸しの形態として現れる。
- ・貨幣資本としては、一般的購買手段と一般的支払い手段とを遂行。この能力は、貨幣資本が資本であることから生ずるのではなく、それが貨幣であることから生ずる。
- ・貨幣機能を資本機能となすものは、資本の運動における貨幣機能の特定の段階。貨幣が商品に換えられ、これらの商品の結合(A + P<sub>m</sub>)が生産資本の現物形態をなす。

□貨幣資本と労働力の売り買い、生産資本への転化

- ・貨幣資本Gの流通→G-P<sub>m</sub>(生産手段)、G-A(労働力)の購入、に分裂。

- ・商品の第1の流通段階、第1の変態である。
- ・労働の売り手からは、彼の商品(労働力)の貨幣形態への変化。受け取った貨幣は、消費物品に支出。
- ・商品の総流通は、A-G-Wとして、第1にはA-G(=W-G)、第2にはG-Wとして表示される。
- ・貨幣は単なる消極的な流通手段、商品と商品の取引の単なる媒介して表れ、W-G-Wにおいて表示される。
- G-Aは、貨幣資本の生産資本への転化の特徴的要因。貨幣形態で前貸された価値が、資本に、剰余価値を生産する価値に、現実には転化されるための本質的条件である。
- ・G-P<sub>m</sub>は、G-Aによって買われた労働量を実現するために必要なだけである。(第1巻第2篇では、G-Aがこの観点から説明された。)

第2巻の本題

□資本の現象形態としての貨幣資本の考察

- ・資本家と賃金労働者との階級関係は、すでに前提されていて、それは売りと買いであり、貨幣関係である。
- ・G-Aが貨幣資本の一機能、貨幣が資本の存在形態と現れるにしても、貨幣が勤労に対する支払い手段として現れるだけではない。支払い手段としての貨幣の機能によるものではない。
- ・貨幣がこの形態で支出されるのは、ただ労働力がその生産手段分離された状態にあるからである。
- ・資本関係が生産過程に現れてくるのは、流通行為のうちに、買い手と売り手とが相対する相異なる経済的根本条件のうちに、彼らの階級関係のうちに存在するからである。
- ・貨幣の本性ととも資本関係が与えられているのではない。この資本関係の存在こそが、単なる貨幣機能を資本機能に転化しうる。
- ・貨幣資本の循環定式、G-W...P...W'-G'は、発展した資本主義的生産の基礎の上でのみ、社会的規模の賃金労働者階級の存在を前提とする。

第2節 第2段階 生産資本の機能

- ・資本の循環は、流通行為G-W、貨幣の商品への転化、買いをもって始まる。流通は、反対の変態W-G、商品の貨幣への転化、売りによって補足される。
- ・G-W (P<sub>m</sub> + A)の直接の結果は、貨幣形態で前貸された資本価値の流通の中断である。貨幣資本の生産資本への転化によって、資本価値は一つの現物形態を受け取るが、この形態においては、それは生産的消費に入らねばならない。
- ・第一段階の結果は、第二段階の開始である。この運動は、G-W (P<sub>m</sub> + A) ...Pと表示され、点線は、資本の流通は中断されているが、資本が商品流通の部面から生産部面に入ることにより、その循環過程は継続している。

・ **第一段階、貨幣資本の生産資本への転化は、第二段階の生産資本の機能の先駆、序曲。**

- G—W (Pm + A) は、この行為を行う個人が、貨幣所有者であり、彼が貨幣所有者でありうるのは、貨幣が彼の手に還流するかぎりにおいてのみ。貨幣は商品売ることによるのみ彼の手に還流する。
- G—A。賃金労働者は、労働力を売ることのみ生活、日々の消費を必要とする。彼が、自己保存に必要な購入、A—G—W、または、W—G—Wなる行為をたえず反復しなければならない。
- この状態は商品としての生産物の流通、商品生産の広がりも高い程度を必要とし、社会的分業の不断の進展を必至とする。G—Aと同じ程度にG—P mが発展する。(生産手段の生産)
- ・ 資本家の資本が貨幣資本として機能する規模は拡大され、すべての商品生産の資本主義的商品生産への移行を促す。

**【生産資本-生産手段と労働力】**

- 生産手段と労働力は、不変資本、可変資本として区別される。生産手段は、生産過程の外にあって、所有する資本家の資本であるが、労働力は、生産過程の内部でのみ個別資本の存在形態となる。
- ・ 労働力はその売り手・賃金労働者の手にあってのみ、商品である。反対に、その買い手の資本家のその時々で使用される時にのみ資本となる。
- ・ 生産手段は、労働力が生産資本の人的存在形態として、生産手段と合体した瞬間からはじめて生産資本となる。
- ・ 人間の労働力が天性から資本なのではないのと同様に、生産手段は、歴史的に発展した特定の諸条件のもとでのみ、この社会的性格を受け取る。貴金属への貨幣の性格が、貨幣に貨幣資本の性格が刻印されるのと同である。
- 生産資本は、その構成部分を消費、より価値の高い生産物量に転化。労働力は、その剰余労働で生み出された生産資本の価値を超える生産物価値の超過分も、また資本の果実である。
- ・ 労働力の剰余労働は、資本の無償労働。資本家のために剰余価値を形成する。生産物は、剰余価値という実を結んだ商品である。
- ・ その価値は、P + Mである。P—その生産に消費された生産資本の価値と、M—この生産資本によって産み出された剰余価値との和に等しい。

**第3節 第3段階。W'—G'**

- ・ 商品は価値増殖された資本価値の、生産過程から生じた機能的存在形態としては、**商品資本**となる。商品形態にあっては、資本は商品機能を行わなければならない。

- ・ 資本を構成する諸物品は、W—Gなる運動を通過する。
- ・ その価値は初めは綿糸()使用価値で存在し、今では貨幣(価値)で存在する。**最初の段階G—Wと、最後の段階W—Gとの間に一つの本質的差異**が現れる。

- 前者は前貸しされた貨幣は、特殊な使用価値をもつ諸商品に換えられ、**貨幣資本として機能**する。後者では、商品が資本として機能するのは、その**流通が始まるまえに、すでに出来上がった資本性格を持って生産過程から出てくる限り**においてのみである。

**【剰余価値】**

- ・ 一万封度の価値  
生産資本によってもたらされた剰余価値をプラス、W'の価値量のうちに含まれる。W'の価値は、剰余価値wだけこの資本価値を超過している。一万封度の糸は、価値増殖されて剰余価値を付加された資本価値の担い手である。それは、資本主義的生産過程の生産物としてである。
- 商品生産物の価値が資本価値と剰余価値から成る。
- 一万封度の糸が、500ポンドという価値どおりに売られるならば、この流通行為は、それだけ見れば、W—Gであり、商品形態から貨幣形態への、一つの不変な価値の単なる転化である。
- しかし、一個別資本の循環における特殊の段階としては、商品によって担われた資本価値422ポンド(不変資本と可変資本の和)と、商品によって担われた剰余価値78ポンドとの和の実現であり、したがって**W—G'**であり、その**商品形態から貨幣形態への商品資本の転化**である。

- W'の機能は、全ての商品生産物同様に、貨幣に転化され、流通段階W—Gを通過する。価値増殖された商品量W'は、W'—G'なる変態を遂行しなければならない。500ポンドの価値が一万封度の糸となる。

$$W' - G' = (W + w) - (G + g) \text{ となる。}$$

$$G - W - A \quad \dots P \dots (W + w) - (G + g) \text{ となる。}$$

P m

- ・ 第一段階 資本家は使用材を商品市場と労働市場から引き出す。第三段階では、彼は商品を投げ出す。しかし、ただ一つの市場、本来の商品市場のみへ戻す。
- ・ 彼は価値Gを投げ入れ、そして等価価値Wを引き出した。しかし、彼はW + wを投げ入れる。そして等価価値G + gを引き出す。
- ・ W'—G'の遂行により、前貸しされた資本価値とともに、剰余価値も実現される。剰余価値wは、生産過程内で初めて生まれ出る。それは初めての商品市場に、**商品形態**で現れる。商品形態は、wの最初の形態であり、wなる行為も最初の流通行為、最初の変態である。この変態は、反対の流通行為、逆の変態g—wによって、補足されなければならない。
- ・ 同じ流通行為W'—G'の、資本価値Wの行う流通につ

いては別である。Wにとっては流通行為W-Gであり、WはPに等しく最初に前貸されたGに等しい。

- 最初の流通行為を、Gとして、貨幣資本として開始し、W-Gなる行為によって同じ形態に復帰する。それは(1)G-Wおよび、(2)W-Gという二つの相対する流通段階を通過する。同じ循環過程を再び新しく開始しうる形態にある。

○ 剰余価値wにとっては、貨幣携帯への商品形態の最初の転化であるものが、資本価値Wにとっては、その最初の貨幣形態への復帰、再転化なのである。

- G-W-A | 資本家の生産資本Pの価値として存在する。  
P m

この現実の変態によって、第一段階でのG-Wで市場から引き出された諸商品は素材的にも、価値的にも異なる商品として置き換えられ、商品として機能、貨幣に転化され売られねばならない。

生産過程は資本価値の流過程の中断としてのみ現れて、そこまでは、流過程はまだ第一段階G-Wが通過されているに過ぎない。

○ 資本価値は、Wが素材的にも価値的にも変化してから第二にして終結的な段階W-Gを通過する。

○ 貨幣で前貸された資本価値(G-W) にとっては、第二の終結的な変態(W-G) であり、貨幣形態への復帰である。

同じ流通行為W'-G'が、商品資本の貨幣形態への転化によつて一緒に実現される剰余価値にとっては、第一の変態、商品形態から貨幣携帯への転化、W-G、第一の流通段階なのである。

○ ここで二つのことに注意

第一に、最初の貨幣形態への資本価値の終局的再転化は、商品資本の一機能である。G-W... P... W'-G' 第二に、この機能は、最初の商品形態から貨幣形態への剰余価値の第一の形態変化( Δ w- g )を含む。

- ここでは、貨幣形態が二重の役割を演ずる。一方では、最初に貨幣で前貸された価値(W) の復帰形態である。したがって、過程を開始した価値形態への復帰(G-W) である。

他方では、それは最初商品形態で流通に入る価値の第一の転化形態(G-W) である。

○ W + wは、同じ価値のG + g に転化される。今や、G + g (422ポンド + 78ポンド = 500ポンド) の形態で実現された商品資本が資本家の手中に存在する。資本価値と剰余価値は、今では貨幣として存在、一般的等価形態で存在する。

○ 過程の開始と終局とが貨幣資本(G) の形態であるからこそ、循環過程のこの形態は、貨幣資本の循環と呼ばれる。

前貸された価値の形態(W、G) ではなく、ただその量のみが終局において変化している。

- G + g = 500ポンドの貨幣額。資本の循環結果、商品資本としては、この貨幣額は資本価値Wと剰余価値wとを含んでいる。

それらは別々に並び、それらの実現が、両者のおののみに独立の貨幣形態(Gとg) を与えた。

その211/250は、資本価値422ポンド、39/250は、78ポンドの剰余価値である。

図解

W	生産手段	372ポンド	G	422ポンド
	労働力	50ポンド		
w	剰余価値	78ポンド	g	78ポンド
				500ポンド

資本価値 422 422/500 = 211/250

剰余価値 78 78/500 = 39/250

- この循環G... G'の結果としては、もはやG'が存在するのみである。G'は、それを生み出した運動から離れて存在する。運動に代わってG'がそこにある。

○ 再びその最初の形態(422ポンド) で存在する前貸し資本Gは、実現された資本として存在する。Gは、その増加分、その果実、増加分gからは区別されて存在する。Gが資本として実現されていると

○ G'は資本関係として存在する。Gはもはや単なる貨幣として現れるのではなく、貨幣資本として、自己を増殖し、自己の有する以上の価値を生み出す属性をもつ価値として表現されている。

○ 貨幣額の単純な存在にあつては、異なる資本構成が生産過程でもつ特殊の差異は、ことごとく消失している。もはや区別は、422ポンドの前貸価値に等しい元本と、78ポンドという超過価値額との概念の形態で存在するに過ぎない。

○ 資本は、その過程の終局において、無概念的表現をもつて現れる。

このことは、W'(W + w) についても言える。W'においても、Wとwとは同じ等質の商品量の量的関係だけの価値部分にすぎない。

W'はそれを直接の生産物とする起源Pを指示しているが、流通から直接に出てくる形態としてのG'では、Pに対する直接の関係が消滅しているという区別がある。

○ G'がG... G'運動の結果の表現するがぎり、G'に含まれている元本と増加分との間の無概念的区別は、G'が能動的に貨幣資本として、再び機能するや否や、(産業資本の貨幣表現として固定されなければ)、ただちに消失する。

○ 貨幣資本の循環は、決してG'をもっては始まりえず、Gをもってのみ始まりうる。すなわち、決して貨幣表現としてではなく、資本価値の前貸し形態(G-W) としてのみ始まる。

○ G'に含まれる資本関係、資本価値としてのG'の一部分

が、その価値増加分としての他の部分に対する関係は、循環  $G \dots G'$  の不断の反復において、 $G'$  が資本流通と剰余価値流通との二つの流通に分裂し、两部分が量的のみでなく、質的にも異なる機能  $G$  (資本) と  $g$  (剰余価値) を行うかぎりでは、機能的な意義を得る。

- 資本の無概念的表式であるとはいえ、 $G' = G + g$  は、同時に初めて実現された形態における貨幣資本、貨幣を生みだした貨幣としてのそれである。
- ここでは、第一段階  $G - W \begin{matrix} \swarrow A \\ \searrow Pm \end{matrix}$  における貨幣資本の機能からは、区別されなければならない。第一段階における  $G$  は、貨幣として流通する。

### 【商品資本から貨幣資本】

- それが貨幣資本として機能するのは、その貨幣状態としてのみ貨幣機能を行うことができ、それは諸商品としてそれに対立する  $P$  (生産) の諸要素  $A$  と  $Pm$  とに置き換えられることができるからである。
- 流通行為においては、それはただの貨幣としてのみ機能 ( $G - W$ ) する。この過程における資本価値の第一段階は同時に、買われる商品  $A$  と  $Pm$  の特殊の使用形態のおかげで、貨幣資本の機能である。
- これに反し、資本価値  $G$  と生み出された剰余価値  $g$  から成る  $G'$  は、増殖した資本価値を資本の総循環過程の目的と結果を、その機能を表現する。
- $G'$  がこの結果を貨幣形態、貨幣資本として表現するのは、それが貨幣形態、貨幣資本であることから生ずるのではなく、逆に資本がこの形態で過程を開始し、貨幣形態で前貸しされたことから生ずる。
- 貨幣形態への再転化は、商品資本  $W'$  の一機能であって、貨幣資本の機能ではない。しかし、 $G'$  と  $G$  との差額について言えば、この差額  $g$  は  $W$  の増加分  $w$  の貨幣形態にすぎない。 $G' = G + g$  であるのは、 $W' = W + w$  だったからに他ならない。
- この差額  $w$  および資本価値  $W$  と、それが生み出した剰余価値  $w$  との関係は、この両者が  $G'$  に転化される前に、相互に異なる独立の機能に充用される貨幣額に貨幣に転化される前に、 $W'$  において存在し表現されている。 $G'$  は  $W'$  の実現の結果にすぎない。
- $G'$  と  $W'$  は、増殖され本価値の異なる形態、商品形態と貨幣形態に過ぎず、両者は増殖された資本価値であることを共通にしている。両者はともに実現された資本である。ここでは資本価値と、それと異なる、それによって得られた果実としての剰余価値と一緒に存在しているからである。
- この関係は、一貨幣額または一商品価値の二部分の関係の無概念的形態において、表現されているに過ぎない。
- しかし、資本によって生産された剰余価値との関係として、またこれと区別されたのとして資本を表現することでは、従って増殖された価値の表現としては、 $G'$  と  $W'$  とは同じものであり、ただ形態を異にするのみである。

- それらが区別されるのは、貨幣資本と商品資本としてではなく、貨幣と商品としてである。
- 増殖した価値・資本を表示する限りでは、生産資本の機能の結果を、資本価値の価値を生む唯一の機能の結果を表現する。
- 貨幣資本も商品資本も、両方とも資本の存在様式である。一方は貨幣形態における資本、他方は商品形態における資本である。
- それらを区別する特殊の機能は、貨幣機能と商品機能との差異以外にはない。
- 商品資本は、その形態におい貨幣資本よりもより多く合理的であり、より少なく無概念的である。  
貨幣においては、商品の一切の特殊使用形態が消失するのと同じく、貨幣資本にあっては、生産過程のすべての痕跡 ( $Pm - C, V, m, A, \dots$ ) が消失している。
- $G'$  そのものが、商品資本として機能する場合においてのみ、 $G'$  が一生産過程の直接的生産物であって、この生産物の転化形態ではない場合にのみ、すなわち貨幣材料そのものの生産 (使用価値形態-においてのみ)  $G$  の奇異な形態 (貨幣形態-田部注) は消失する。

### 第四節 総循環

- 流過程は、第一段階  $P \begin{matrix} G - W \\ \swarrow A \\ \searrow Pm \end{matrix}$  の終了後  $P$  により中断され、商品  $A$  と  $Pm$  が、生産資本の素材的および価値的構成部分として消費される。  
この消費の生産物は、素材的にも価値的にも変化した  $W'$  である。
- 流通系列は、(1)  $G - W1$ 、(2)  $W'2 - G'$  の2系列で表示される。中断中 (生産) に、生産資本  $P$  の機能により、 $P$  の存在形態  $W1$  は、より高い価値と異なる使用形態をもつ商品  $W'2$  に、すり替わる。
- これに反し、「資本の一般定式」(第四章第一節)、 $G - W - G'$  では、同じ商品が二回現れた。この本質的差異に関わらず、両者に共通な点は、第一段階では貨幣が商品に、第二段階では商品が貨幣に転化し、支出した貨幣が再び還流する。
- また一方では、貨幣が出発点に還流し、他方では、前貸し貨幣を超過することを共通にしており、そのかぎりでは、 $G - W \dots W' - G'$  も一般定式  $G - W - G'$  に含まれて現れる。
- 総運動では、資本は、一つの総過程の一連の諸変態を通過する一つの価値である。二つの流通部面と一つの生産部面で、資本価値は異なる態容を保ち、それぞれ特殊機能に対応する。その内部で、前貸し価値が保存されるだけでなく、成長し大きさを増す。最後に、前貸し価値は、総過程の出発点と同じ形態に帰る。それゆえこの総過程は循環過程なのである。
- 資本価値は総循環中に貨幣資本・生産資本・商品資本の諸形態をとる。総循環中にこれらの形態を採っては

棄て、各形態に対応する機能を行う資本は、産業資本である。3形態は独立の資本種類ではなく、産業資本の特殊形態を表すにすぎない。

- ・ 不変資本の一部(労働手段、機械)は生産過程中何回か反復、新たに役立ち、の価値を一部ずつ生産物に移すに過ぎない。
- ・ 資本循環は、諸段階が停滞なく移行することで、正常に進行する。G - Wの停滞は貨幣資本が退蔵貨幣となり、生産の停滞は生産手段と労働力が機能せず、W' - G'の停滞は売れずに堆積する商品が流通を遮断する。他面では、一定期間、各循環段階に資本が固定されるのは当然で、産業資本は諸資本形態に拘束され、その機能の遂行後でのみ新たな段階に移る。最初の前貸し全資本価値は、段階ごとに、一度に移るものと仮定しておいた。
- ・ 一般定式においては、Pの生産物は、生産資本の諸要素とは異なる物質的なもので、生産過程から分離された存在、生産諸要素の使用形態とは異なる使用形態をもつ。これは生産物が、再生産の生産手段となる場合でも変わらない。

### 【交通・運輸業

】・しかし、生産物が新たな対象的生産物や商品ではない、独立の産業部門がある。そのうち、経済的に重要なものは交通業だけで、それは本来の運輸業であっても良いし、報道、書信、電信等の伝達であっても良い。その結果は、人であれ商品であれ、「場所的存在の変更」である。

- ・ 産出効果は運輸過程、運輸業の生産過程と不可分に結びついている。運輸手段の場所移動こそ生産過程であり、その効果は生産過程の中でのみ消費され、生産後に使用物として存在するのではない。
- ・ しかし、この効果の交換価値は、他の商品と同様、消費された生産要素の価値と従事労働者がつくりだす剰余価値を加えたものに規定されている。この効果は消費に関しても、他の諸商品の場合と全く同じであり、個人的に消費されればその価値は消滅し、生産的消費であればその価値は追加価値として商品の上に移される。
- ・ 運輸業の定式は、 $G - W(A \cdot P m) \dots P \dots G'(G + g)$ となり、生産過程そのものが支払われる。また、貴金属生産の定式と同じ形態を持っており、運輸業のG'は生産過程に産み出された「効果の転化形態」であって、生産物として生み出される現物形態ではない。
- ・ 産業資本は、剰余価値・剰余生産物取得と剰余価値創造が資本の機能である資本、の唯一の存在形態である。それは、生産の資本主義的性格を欠くべからざる条件とする。産業資本の存在は、資本家と賃金労働者との階級対立の存在を含み、それ以前の社会的生産状態の中に現れた他の種類の資本は、産業資本に従属し、適応・変化し、産業資本の基礎の上でのみ運動し、生滅・興亡する。
- ・ 貨幣資本と商品資本は、産業資本が流通部面内部で

採っては棄てる種々の機能形態の、社会的分業によって独立化され、一面的に育成された存在様式にすぎない。

- ・ 循環G... G'は、個別資本家にとっては、資本価値の特有な独立の運動を形成し、一部は一般的商品流通の内部で、一部はその外部で行われるが、常にその独立の性格を失わない。
  - それは①流通の二部面G - W、W' - G'が資本運動の段階として機能的に規定された性格を持つ、前者では労働力と生産手段という素材の規定、後者では資本価値が剰余価値をプラスして実現すること、
  - ②生産過程Pは、生産的消費を含むこと、③運動の出発点への貨幣の復帰は、運動G... G'をそれ自身において完結する循環運動とする。
- ・ かくして、一方では、各個別資本は貨幣・商品として機能する一般的商品流通の一動因、一般の変態系列の一環である。他方では、一般的流通内部でそれ自身の独自の循環を描き、そこでは生産部面は一つの過渡段階で、資本は出発したときと同じ状態でその出発点に帰る。生産過程での現実の変態とともに、それ自身の循環の内部で価値量を変え、大きくされた貨幣価値として復帰する。

最後に、総運動G - W... P... W' - G'の、後の研究諸形態(P·W)と比較した場合の特殊性は、

①貨幣資本循環として現れるのは、貨幣資本が出発点・復帰点をなしているからである。この定式自体が、貨幣が貨幣として支出されるのではなく前貸しされる貨幣資本であることを表す。

また、交換価値が運動の規定的目的であり、貨幣を出発点・終点とすることは推進動機である金儲けを明瞭に表している。生産過程は金儲けの不可避な中間項・必然悪として現れるにすぎない。

②生産段階Pの機能は、単純流通を媒介するG - WとW' - G'の二段階を中断する。また、生産過程はこの循環過程そのものの形態で、本来の形で明瞭に資本主義的生産様式に合致する、前貸し資本の増殖手段として、致富としての致富として、現れる。

③出発点で増殖されるべき貨幣資本Gと、終点では実現された資本G + gが現れる。このことが、Gの循環を他の循環PとW'から二つの仕方で区別する。

①一方で、両極の、一切の使用価値の痕跡が消失した独立の価値形態である貨幣形態であること。②他方で、Pの循環(P... P)は必ずしもP + pとならず、W'の循環(W'... W')は一般に価値差異は認められない。

以上から、一方では、前貸し資本価値は出発点・手段であり、増殖された資本価値が復帰点・目的である。他方では、資本価値が独立の価値形態である貨幣形態で明瞭に示されている。

④最終段階の実現された貨幣資本G'は、循環開始と同じ形態にあるから、再循環可能ではあるが、gがどう流通するかはG - G'では規定されておらず、形式的には価

値増殖と蓄積の過程のみを表現する。また、ここでの消費は生産的消費のみ表現されており、労働者の個人消費は、資本の循環には入らない。

- しかし、第一段階  $G - A$  を糸口とした第二段階  $G - W$  と個人消費による労働力の再生産は、この循環の外にこの循環の条件として前提されている。労働者並みの消費で十分であろう資本家も消費することは前提されているのだが、この定式は増大された貨幣資本  $G'$  の結果で終わっているので、そのことは表現されていない。

さらに、循環には  $W'$  の販売が含まれているが、買われた商品が使用価値として個人的あるいは生産的に消費される過程は、個別資本の循環には入らず、「突き出され」外に出る。

- かくして、資本の循環過程は流通と生産との統一であり、この両者を包含する。最初と最後が流通工程であるから、資本流通は、一般的商品流通の部分となす。

一般的商品流通は資本循環の第一段階では資本が生産資本機能をとるのに役立つ。

第二段階では、価値増殖を果たすため商品機能を突き放すのに役立ち、また、 $G$  の資本循環 ( $W$ ) を剰余価値  $g(w)$  の流通から分離する可能性を与える。

- それゆえ、貨幣資本の循環は、産業資本循環の最も一面的、もっとも適切・特徴的な現象形態であり、価値増殖という産業資本の目的と推進動機が一目瞭然に表示される。

### 【産業資本・社会的総資本の循環】

- 一般に資本主義的生産過程は流通・商業に制約され、貨幣資本循環は流通を前提とする。このことは、第一段階で前貸資本価値が「貨幣形態  $G$ 」で、最初に純粋に現れることに示されており、他の  $P \cdot W$  の二つの段階には見られないこと。
- 貨幣資本循環は常に前貸資本価値の増殖を含むので、産業資本の一般的表現である。
- 新資本は必ず貨幣前貸から始まるこの循環をとるから、貨幣資本循環は産業資本循環の「特殊の形態」である。資本の最初の循環であり最後の循環でもあり、社会的総資本の循環形態である。
- 社会的総資本の循環は、剰余価値を生む可変資本のためにこの循環をする。その日暮らしの労働者への賃金「前貸」は、ごく短期で更新される現金払いであり、生産手段や生産物売買での「掛け売買」決済は行われず、資本  $G$  を貨幣資本として準備しなければならない。
- 他方、可変資本から生ずる剰余価値の一部を、資本家は私的消費する。この消費も小売商業に属し、現金・剰余価値  $g$  の貨幣形態で支払われる。よって、 $G$  と  $g$  は必ず貨幣形態で保持される。
- 循環定式の  $G' = G + g$  という結果は、一つの欺瞞・眩惑的性格(物神性)を帯びるが、その力点は、「価値自体の増殖」にあるのではなく、前貸された「貨幣形態」がより多くの「貨幣形態」で戻ってくるという、資本家の金銀量

の増加にある。重金主義は、無概念的形態  $G - W - G'$  の表現でしかなく、 $W$  が価値以上に売られ、購入に投じた以上のより多くの貨幣が戻ってくると説明した。

より発展した重商主義の「根底には」、資本循環定式があり、商品生産もまた必然的要素として現れている。

貨幣資本循環形態の、①幻想的性格と②幻想的解釈は、更新されない一回限りの時に、他の  $P$  循環・ $W$  循環などの諸形態の一つではない唯一のものと思なされる時に、現れる。しかしこの形態は、それ自身、他の諸形態  $P \cdot W$  を指示している。

- ①この総循環は、資本主義的生産過程を前提とし、その生産過程とそれに制約された特殊な社会状態とを前提とする。貨幣資本  $G$  が買う  $W$  は、賃金労働者  $A$  を、したがって彼らが扱う生産手段を前提とし、労働過程 = 価値増殖過程という資本機能としての生産過程を前提している。

②  $G - G'$  が繰り返されると、貨幣形態への復帰  $G'$  と前貸貨幣  $G$  は一時的なものになり、 $G - W$  は消失して、 $P$  に席を譲る。 $G \cdot G'$  は、循環内で消失するにすぎない要因として現れる。

③循環の反復により、循環は  $P \dots P$  という生産資本の循環として考察できる。貨幣資本循環の第一段階  $G - W$  は、反復される生産資本の単なる準備段階にすぎなくなる。

④他面では、 $W' - W'$  の商品資本の循環も現れる。それらの中で、貨幣形態は、等価形態である貨幣による価値表現としては、消失する。

⑤最後に、初めて循環を描く資本の  $G - W$  は、最初を生産過程の準備段階・先駆であり、生産の前提ではなく生産過程によって設定・規定されている(生産過程の決定権)。

しかしそれは、この新規の個別資本にのみ妥当する。それ以外の、資本主義的生産の社会では、産業資本循環の一般的形態は、貨幣資本である。だから資本主義的な「生産過程」は、(貨幣資本循環の一般化の)一つの先行条件として前提されている。

- 貨幣資本循環を一般化する資本主義的「生産過程」の更新継続は、 $P \dots P$  なる循環の継続更新を前提にしている。というのは、第一段階ですでに、 $A \cdot$  賃金労働者が前提( $P$ を継続しなければ死滅してしまう)、他方では買手の  $G - W$  は売手の  $W'$  という商品資本を前提(資本の価値増殖が実現できなければ崩壊)にしつつ、生産資本の機能を前提(そのためには生産  $P$  は継続更新が必要条件)するからである。